

But there was no saving her now. Her body was swelling up and changing shape at such a rate that within a minute it had turned into nothing less than an enormous round blue ball – a gigantic blueberry, in fact – and all that remained of Violet Beauregarde herself was a tiny pair of legs and a tiny pair of arms sticking out of the great round fruit and little head on top.

'It always happens like that,' sighed Mr Wonka. 'I've tried it twenty times in the Testing Room on twenty Oompa-Loompas, and every one of them finished up as a blueberry. It's most annoying. I just can't understand it.'

'But I don't want a blueberry for a daughter!' yelled Mrs Beauregarde. 'Put her back to what she was this instant!'

しかし、もう助けようがない。全身がふくれあがり、ものすごい早さで形が変わっていき、一分もしないうちに、巨大なまんまるい青の球になってしまった——というか、巨大なブルーベリー——バイオレット・アゴストロングの面影の残るのは、小さな二本の足と、大きなまんまるいフルーツから突き出ている小さな二本の腕と、そのてっぺんの頭だけなのだ。

「いつもこうなってしまう」と、ワンカ氏がため息をつく。「実験室で二十人のウンパツパ・ルンパツパ人たちに二十べんも試したんですが、一人残らず、結局はブルーベリーになる。まったくいらいらする。どうにもわからない」

「でも、娘をブルーベリーにしてもらいたくないわよ!」と、アゴストロング夫人がわめく。

「いますぐ、もとのあの子にもどして!」

といって、いまのところ、バイオレットを助ける方法は、見あたりません。娘のからだは、みるうちに、プクプクと、ふくれきて、一分もしないうちに、巨大な、まんまるの青い球、つまり、大きな大きなブルーベリーそっくりに、ふくれあがってしまいました。そして、バイオレットのおもかげが、のこっているものといったら、巨大な、青い果実から、ニョキッと、突き出ている、ちっぼけな二本の足と、ちっぼけな二本の腕、てっぺんについている、小さな頭だけ。

「いつも、こうなってしまうんでね。」と、ワンカさんは、ホッと、ため息をついて、「じつは、実験室で、二十人のウンパ・ルンパ族をつかって、二十回も、わたしはテストしてみたのです。ところが、そろいもそろって、ひとりのこらず、最後には、ブルーベリーになってしまうんですよ。ほんとうに、いやになってしまう! どうも、わからない!」

「そんなこといったって、うちの娘を、ブルーベリーにしてくれと、たのんだおぼえはありませんからね。さあ、いますぐ、この娘を、もとのからだに、かえしてください!」と、バイオレットのおかあさんが、わめきちらします。

